

## 第1回 魅力と活力ある県立高校づくり検討委員会

日 時：平成18年3月20日(月) 14:00～16:30

場 所：サンラポーむらくも 瑞雲の間

### 1. 開 会

### 2. 委嘱状交付

〔広沢教育長から17名の委員(20名中欠席3名)に委嘱状を交付〕

### 3. 教育長挨拶

#### 広沢教育長

一言ごあいさつを申し上げます。

本日は、御多用の中を御出席いただき、まことにありがとうございます。ただいま委員の皆様方、委嘱状をもってお願いをいたしました。このたびの委員就任に際しまして、快くお引き受けいただき、また、公募の委員の方には、11名の応募者の中から2名の方に御就任いただくことになりました。心から感謝申し上げる次第でございます。

さて、本県の高校教育は、現状さまざまな問題を抱えておりますが、その中で、最も憂慮され困難な問題は、少子化に伴う生徒数の減少であります。現在、平成11年度から20年度までの計画である県立学校再編成基本計画に基づき、高校の再編成を実施しておりますが、これまで生徒数の減への対応として、基本的に各高校の学級数を平均して削減していく方法で対処してまいりました。しかし、今後も学級減だけで対応していくとすれば、学校の規模がますます小規模となり、高校としてふさわしい教育内容が提供できなくなるという状況が生じてまいります。

そこで、初めて本校同士の統合である益田工業高等学校、益田産業高等学校、そして、川本高校と邑智高校の統合を決定をいたしました。学校の小規模化は、配置される教員の数が増えるため、生徒の興味、関心や進路希望に対応した多様な学習内容を提供できなくなることや、部活動が縮小し選択肢も少なくなること。また、大人の一手手前にいる高校生にとって、大切な切磋琢磨する教育環境が失われることなど、さまざまな問題を引き起こします。

一方、高校が地域の文化の拠点となっていたり、地域の活力を引き出している場合があり、高校の廃校が地域に大きなダメージを与えたり、生徒が遠距離通学や下宿などを余儀なくされる事態が生じてまいります。高校の再編成において、これら相対立する事柄をどのように調整していくのか、非常に悩ましい問題でもあります。

ただ、生徒にとって、何が最良なのかという観点が一番大切であり、そのような観点から、高校教育のあり方を考えていくことが重要であると考えております。

委員の皆様方には、平成21年度以降の高校教育のあり方全般について御審議いただくわけですが、こうした観点を中心に据えていただきまして、行政の視点を越えた幅広い視点から議論を展開していただきたいと思っております。

そして、この検討委員会において、将来の島根を担う高校生が、大きな魅力を感じ、生き生きと勉強や部活動に励み、自分の可能性を伸ばしていくことができる、そうした高校

のグランドデザインが示されることを期待しているところであります。どうかよろしくお願い申し上げます。

#### 4. 検討委員会設置要綱の説明

〔事務局から説明：「魅力と活力ある県立高校づくり検討委員会設置要綱」〕

#### 5. 検討委員会委員自己紹介

〔委員自己紹介：委員名簿順に - 省略 - 〕

〔教育委員会事務局紹介：席次表に従って〕

#### 6. 会長・副会長の選任

〔設置要綱第4条第1項による。会長に井上委員を、副会長に多々納委員を選任〕

#### 7. 諮問

〔広沢教育長より井上定彦会長へ諮問：諮問文〕

#### 8. 会長挨拶

##### 井上会長

今、広沢教育長から諮問を承りました。先ほども考えていましたが、一体、これだけの重責を担えるだろうかと迷っていたわけですが、2つの理由で、これはやりがいのある仕事かもしれないと思いました。しかも、ある程度のことはできるのではないかと今日の会場で思いました。

まず、最初は、魅力と活力ある県立高校づくり検討委員会という題を見たときです。無論、生徒数が減少していく中で、今後の高校のあり方をどのようにしていくかという論点はございますが、何と云っても、本当にどうしたら魅力と活力ある県立高校づくりができるのかという、これはやりがいのある仕事だなというふうに思います。と申しますのも、私どもの小学校時代、中学時代というのは、とても困っていたわけですが。例えば私、小・中学校ともに1クラス編成60人ぐらいで、中学の3年のときは64人でした。こんなに人口が増えて日本はどうなるんだろうかと。今はある意味では幸いにも、少し少子高齢社会になって、質の高い教育の条件が、むしろ拡大しているというふうにも感じております。そのような意味で、魅力と活力ある県立高校づくりの、いわば前向きな議論ができるのではないかとというのが、最初の、この題を見たときの私の感想でありました。

また、今、皆さんの自己紹介を伺っておりますと、この顔ぶれだったらおもしろい議論ができると感じました。ここには幼稚園から大学まで、何よりも学校教育を経て社会の一構成員、社会を担う会社の従業員あるいは会社の経営者、そういう多様な階層の中の代表的な論客が集まっておられるわけでありまして。今、学校が時代の中で役割、位置を変容させていることは御案内のとおりでございます。広く言えば、グローバル化の中の知識基盤型社会、その時代における教育、人材育成、広い意味での人間力をどのようにして育てて

いくことができるのか。そして、そのことと地域の命運というのがどのように関わっているのかということが問われている時代ではないかと思えます。

私の大学でも、既に2007年問題という、団塊の世代ではなく、大学全入時代の到来という課題があります。高校全入、大学全入というのは、かつては夢のようなすばらしい話で、とてもそんなことができないので、全国高校全入運動というのが地域社会運動としてあったことを覚えております。今はほとんど高校全入に近い状態になっており、なおかつ大学全入が可能になるという、非常にいい状態になってきてるわけですが、同時に、その光の裏には真に小・中・高・大を含めて知的体力が備わっているかどうか、社会の変化に適應できる総合的な、全人的な人々が、学生や子供たちが育っているのだろうか。さらに言えば、教育というのは、決して青年を含む子供たちだけの問題ではありません。私も生まれてから最後に息を引き取るときまで、リカレントといいますが、いつも学習し、いつも自己革新し、いつも現実と闘っていくという方々がきょうはそろっていらっしゃるわけであります。そういう点で、大いに議論を闘わせ、そのことが地域における人間力を育てていく。つまり私は島根というのは、これまでもたくさんの人材を、人間力のある人々を育ててこられたわけです。これから、全国一の少子高齢県として、その時代に見合ったすばらしい人材づくりをしていく。このことは小・中学校は、ある程度、文部科学省の管轄の範囲が現在でも非常に大きいわけであります。大学は、国立大学法人や公立大学法人になっても、やはり文部科学省の管轄の範囲がそれぞれあるわけがございます。しかしながら、高等学校、特に県立高校というのは、その地域の独自の創意工夫が可能であります。かつて、この島根県は多くの教育に関しての先進的な事例を幾つも持っております。そういう点で、これからの県の後期中等教育を上と下とつないで、あるいは社会とつないで人材育成をしていくというところでは、なかなかいい位置にこの会があるのではないかと感じております。

少子高齢化、幸いにも全国で一番進んでおり、生徒数が減る中で、いかにして質の高い教育へと転換できるのか、つまり魅力と活力ある県立高校づくりができるのか。その際、恐らく私学のさまざまな経験も生きてくるでしょう。企業や地域社会のさまざまな活動や地域おこしの課題と高校教育とはどういう関係になっているのだろうか。キャリア形成という点から見たときに、今は決して本当の学歴社会ではないように感じます。同期の中で東大に入ったからかなりいいとこまで行くのかと思うと、多分3分の1ぐらいは人生、どちらかという、やや気の毒な立場になる。それは恐らく小・中・高までのやっぱり人間育成というところにかかなり関わる面があるようにも思います。

そういう点で、少子高齢化の先頭に行く我が県で、平成21年度から先の10年間を展望して、よりよき県立高校のあり方を皆さんのお知恵をおかりして、よりよき未来に、子供たちに、そして人々に引き継ぐことができるような議論ができればありがたい、ぜひ皆さんの御協力でそういう会にしていきたいと思えます。どうぞよろしくお願い申し上げます。

## 9. 議 事

## 【 議事日程説明・資料確認 】

### 議長

それでは、議事に入る前に、本日の会議は、島根県情報公開条例第34条に基づき公開となっていることを確認しておく。

## 【 議題（１）検討スケジュールについて 】(資料１)

### 事務局

〔資料１「魅力と活力ある県立高校づくり検討委員会スケジュール(案)」により説明〕

平成19年の10月に答申案の審議、確定の後、広く県民からパブリックコメントを募り、平成20年1月、第11回検討委員会で、答申案の修正、答申案の審議、最終的な答申案を確定していただき、20年3月に答申をいただきたい。

この最終答申を受けて、平成20年度中に県の計画を策定し、公表していく。

### 委員

学校視察の主な目的は何か、今一度確認したい。

### 事務局

校長や教職員との意見交換を行い、現状や課題について議論していただきたい。また、授業や学校の施設・設備等の教育環境についても、現状を見ていただきたい。

### 委員

自分の経験上、予めスケジュールを立てて訪問すると、受け入れ側は完全な準備をして、現状把握にならない傾向がある。そういう意味で、突然訪問したときと全く違う場合がある。ただ単に人数がどうなのか、地域がどうなのかということを見るのであればそれでよいが、授業の内容とか生徒の態度とかという現状を知りたいなら、予め知らせない方がよいのではないかと思う。ぜひそうしてほしいという意味ではなく、参考にさせていただきたい。

### 事務局

どこまで参考にできるか分からないが、検討してみたい。

### 議長

それでは、特に御意見がなければ、今の意見を少し考えていただき、基本的には了承いただくということによろしいか。 《 委員同意 》

では、スケジュール表に沿って検討を進めていくこととする。

## 【 議題（２）県立高校に関連する資料について 】(資料２)

### 事務局

## 資料2「県立学校の設置学科・学級数（平成18年度）と再編成基本計画の実施状況について

現在、県立学校再編成基本計画により、平成11年度から平成20年度までを計画期間として再編成を進めている。

1ページから3ページまでは、この計画期間中のこれまでの実績と、今後の見込みをまとめた表である。この表の学級数は、平成18年度の第1学年の学級数であり、全日制は合計154学級となっている。

平成11年度から平成18年度までの学科改編等について、全日制では、生徒数の減に伴って、38学級の削減を行った。

学科改編の詳細については、4ページから7ページのところで図解しているが、主に専門高校において、学級減にあわせて学科改編を行っている。

6ページの中ほどに川本高校と邑智高校があるが、邑智高校は従来から1学年2学級の高校であったが、川本高校が平成17年度に1学年2学級となったため、約16キロメートルという近い距離に1学年2学級の小規模校が並列するという状況になった。また、この地域の生徒が、川本高校、邑智高校に進学する割合が年々低下してきており、沿線部の高校への進学率が増加していることから、ある程度通学が可能な範囲内に、望ましい教育環境を提供できる求心力のある高校を作っていく必要があるとの判断により、両校を統合することとした。統合校は、平成19年4月に県内初の普通科コース制・総合選択制をとる1学年4学級の高校として新たにスタートする予定である。

この普通科コース制・総合選択制は、設定された複数のコースの中から、生徒が進路希望等に応じたコースを選択し、その分野の知識・技能を深めるとともに、自由選択科目を設定することにより、所属するコースの枠を越えて、幅広い分野の科目を学ぶことができるというものであり、統合に際し、新しい魅力を付加することが必要との考え方に基づき導入することとした。

次に、7ページの益田地域について、平成17年度に益田工業高校が1学年2学級になることが見込まれたため、益田工業高校と益田産業高校を統合し、充実した専門教育が行える新しい高校を作ることとした。具体的には電気科1、電子機械科1の工業系学科を2学科、生物生産工学科1、環境土木科1の農業系学科を2学科、さらに総合学科1学科を備えた1学年5学級の学校が、平成18年4月に益田翔陽高校として新たにスタートすることを決定している。これまで、本校同士の統合を行ったのはこの2事例である。

また、1～2ページの表の右側に平成19年度から20年度の学科改編の見込みを記載しているが、これは県立学校後期再編成計画に記載しているもので、確定したのではなく、あくまで予測あるいは可能性を示したものである。

なお、高校の統廃合については、配付している「県立学校後期再編成計画」の6ページに記載している統廃合基準に基づいて検討、実施することとしている。統廃合基準は、普通科を設置する高校についての基準、専門高校又は総合学科を設置する高校についての基準、分校または1学年1学級本校についての基準から構成されている。

川本高校と邑智高校との統合については、普通科を設置する高校の基準、益田産業高校と益田工業高校との統合については、専門高校の基準に基づき、それぞれ検討・決定した。

資料2ページの浜田水産高校と隠岐水産高校については、いずれも平成15年度から1

学年2学級校となったため、専門高校の基準に基づき、それぞれ浜田商業、隠岐高校との統合について、できるだけ早い時期に再編成方針を具体化するとしている。水産高校については、長期の乗船実習を課す学科がある、あるいは海に隣接する実習施設が必要であるなどの特殊性があるため、たとえ小規模であっても単独で残すべきであるという意見もあり、単独校として存続する場合、統合した場合、それぞれの教育内容や効果がどのようになるのか、他県の事例などを参考にしながら検討しているところであるが、この検討委員会において、ご意見をいただきたいと考えている。

また、県内には掛合分校、佐田分校、今市分校の3つの全日制課程の分校があるが、いずれも大きな定員割れが続いており、今後も生徒数が減少するものと予測されているため、統廃合基準に基づき、3校の募集停止を検討しているところである。この募集停止の判断、実施については、それぞれ分校やその地域が抱えている事情が異なるので、個々の状況を踏まえた上で判断することとしている。

次に、2ページの下の方の吉賀高校は平成16年度に、島前高校は平成18年度に1学年1学級校となったが、両校の地理的条件等を考慮し、当面、1学年1学級本校として、存続することとしている。

次に、3ページの定時制、通信制高校について、現在、県内には定時制4校、通信制1校を設置している。定時制、通信制は、従来、働きながら学ぶ生徒の教育の場であったが、現在ではそうした生徒ばかりではなく、全日制の中途退学者あるいは転・編入者、自分のペースで学習の進捗、内容を選択したい生徒など多様な生徒が在籍している。このような状況を踏まえ、県東部については、松江南高校宍道分校、松江工業高校定時制の普通科、出雲高校の定時制、松江北高校の通信制を統合再編成し、東部独立校（仮称）として平成22年4月に松江市宍道町の県林業技術センターの跡地に設置する予定である。

県西部については、浜田高校の定時制を拡充し、既設の夜間部に加えて、昼間部を設置するとともに、通信制についても、これまでの休日スクーリングに加えて、平日スクーリングを実施する西部拠点校（仮称）として整備する予定である。

次に、資料3は市立松江女子高校を含めた公立高校の配置図である。5ページには、特殊教育諸学校の配置図を載せている。今後の特殊教育諸学校のあり方については、県教育委員会において、別の計画を策定中である。

## **事務局**

### **資料4「公立高等学校の学校別、学科別、学年別、男女別生徒数」について説明。**

各高校ごとに17年5月1日現在の生徒数を掲載している。1ページから2ページは全日制高校の生徒数を、3ページには定時制・通信制課程、専攻科の生徒数と舎生数を掲載している。

### **資料5「平成17年度島根県公立高等学校入学者選抜状況」について説明。**

昨年の島根県公立高等学校入学者選抜の状況を掲載している。資料の中程には、平成16年度、17年度、18年度の定員に対する競争率を掲載している。

### **資料6「県立高校の学科・学級数並びに中学校卒業生数の推移」について説明。**

県立高校の学科・学級数並びに中学校卒業生数の推移を掲載している。1ページ目が県内全体の数値で、2ページ以降が県内各地域ごとの数値である。中ほどに から まで

生徒数資料の説明を記載しているが、平成16年、17年は、それぞれ中学校卒業者の実数、18年度から26年度までは、平成17年5月1日現在の小・中学校の該当学年の在籍者数、平成27年から平成30年までの間は、平成16年の市町村年齢階級別の推計人口である。

1 ページ目の棒グラフを見ると、県内の中学校卒業生数は、年度間の増減はあるものの、基本的に減少が続き、平成21年には7,306人、平成30年には5,849人となり、10年間で約1,500名の減少が予測される。

2 ページ以降の各地区においても全県の状況と同じように年度間の増減はあるが、基本的に減少傾向である。

## 事務局

### 資料7「平成17年3月県立高校卒業生（平成16年度卒業生）の進路状況」について説明。

1 ページ目は、平成17年3月の県立高校卒業生100人あたりの進路状況を学科別に示したものである。

なお、松江農林高校と益田産業高校は農業科と総合学科を、矢上高校は普通科と農業科を設置している。三刀屋高校は現在は総合学科であるが、平成17年3月の卒業生は、普通科の卒業生である。

2 ページ目は、県内・県外別の求人数の実数と卒業生100人あたりの求人数である。中ほどのグラフは、卒業生100人あたりの求人数を示したものである。

3 ページ目は、各教育事務所管内別の求人及び就職について掲載している。県内就職は、地元からの求人数が大きく影響していることが分かる。

4 ページ目は、平成17年度学校基本調査による就職者100人あたりの産業別就職人数である。

5 ページ目は、平成18年2月に高校教育課の独自調査による就職者100人あたりの職業別の県内就職人数である。

6 ページは、就職者100人あたりの県内外の職業別の就職人数である。

## 事務局

### 資料の訂正について

資料3の5ページに特殊教育諸学校の配置図を掲載しているが、益田地区で益田養護学校が抜けている。また、松江地区で松江精神養護となっているが、松江清心養護に訂正をお願いしたい。

## 議長

以上、県立高校に関連する資料について、事務局から説明があったが、膨大な資料であり、メモをとり切れないところや聞き落としたというようなところもあるかと思うので、質問願いたい。

## 委員

資料2の3ページ、定時制高校について、今後の学科再編等の見込みの一番下のところに、設置基本構想は平成18年3月に公表予定とあるが、これは近々発表されるということか。

**事務局**

3月24日に公表する予定である。

**委員**

資料7で、卒業者の進路状況の説明があり、就職関係は大変詳しく出ているが、数の方で圧倒的に多い進学状況については、改めて資料が出るのか。

**事務局**

次回以降に提出する予定である。

**委員**

資料2の6ページの19年度統合新設の4コースについて、具体的な内容はどうか。

**事務局**

現時点で決定したものではないが、人文科学、自然科学については大学進学に対応するコースである。現代ビジネスは、高度情報通信社会における商取引に必要な知識・技能を学ぶコースである。地域創造は、地域を学習の場として文化や自然について理解を深めるとともに、その課題や可能性、あるいは将来像を考え行動する能力や態度を養うコースである。

**議長**

川本高校、邑智高校が統合して4クラスになり、総合選択制ということで、従来の大学の学部にあるような形で4コースを考えているようだが、いつ固まるのか？

**事務局**

3月中に中間まとめを公表する予定である。

**議長**

総合選択制というのは、全国的にかなり広がっているのか？

**事務局**

広がりつつある。

**委員**

吉賀高校と隠岐島前高校は、1学年1学級本校として、当面、存続するとの説明があったが、21年度以降も1学年1学級本校の存続があるのかどうかということもこの検討委

員会の検討事項に入るのか？

**委員**

1学級の人数はどうなっているのか？昔、私のときは1学級の定員数は40人であったが、今も変わらないか？また例えば1学級が25人とかになっても存続ということがあり得るのか？

**事務局**

現在、公立高校の1学級の定員は40人である。21年度以降の吉賀高校と隠岐島前高校については、新たな統廃合基準を作るのか、どのような基準とするのかによることになる。

**委員**

資料2の6ページで19年度の川本・邑智の統合新設について、現在、川本、邑智とも2学級ずつであるが、両校とも定員割れをしている。このような状況で統合時の学級数は4学級となっているが、コース制・総合選択制という新しい形になることで、今までは、地域から生徒を募集するという感じだったのが、全県的に生徒を募集するという形になるのか？

**事務局**

他にはないコース制・総合選択制高校であるため、全県学区とする予定である。

**委員**

分校と同じ規模でも1学級本校というものがあるが、名前は違うにしても、1学級本校と1学級分校はどのように違うのか？

**事務局**

大きな違いは、本校は校長が配置されるが、分校は本校の校長が兼ねることである。

**委員**

教員の配置基準が違うのか？

**事務局**

本校と分校では異なる。

**議長**

そうなる規模は小さくても本校の方が、教育環境としては、ある意味では充実をされる可能性があるということか？例えば吉賀高校は益田高校の分校でもよさそうであるが、浜田の今市分校にしても、どういう区分けがされているのか？

## 事務局

高等学校の設置基準において、本校は、収容定員240名以上となっている。240名というのは、1学年80名であり、1学年2学級以上が必要となる。1学年1学級本校というのは想定されていないものであるが、本校として存続してきた高校が1学級になった場合、その地理的条件等から、当面、本校として存続することはあり得る。

なお、校長以外の教員配置に違いはない。

## 委員

コース制、単位制ということになると、卒業できない生徒が増えるのではないか？

## 事務局

県立高校の多くが学年制であるが、学年ごとに決められた履修科目の単位を取得して進級・卒業することになる学年制に対し、単位制は、基本的に学年による履修科目の区分を設けず、3年間または4年間の修業年限に必要な単位数を満たせば卒業できるシステムである。システムの違いはあっても必要な単位を取得して卒業するという点で違いはない。

なお、コース制は、進路希望等に沿った分野を中心に学習するというを目的としたシステムであり、卒業の難易度との関係はない。

## 委員

何年かけてもいいから単位をとれば卒業できるのか？

## 事務局

学則により、修業年限の上限を設けている学校もある。

## 委員

どんどん少子化が進み、定数240人に足りないからと、文科省のルールに基づき、残すか入れるかという話ばかりで、本来の教育の質の話はどこに行ったのかと思う。島根県の高校生の質が落ちたのも、県の組織が小・中・高と一貫していたのが、高校教育課と義務教育課の2つに分かれたため、意思の疎通が図られていないということも関係しているのではないかと。高校の科目の自由選択については、個人的には反対である。今の学生には、基本的な言語能力とか漢字とか、日本人が本来身につけるべき基本的なことは絶対教えてほしい。島根県の学生は、これぐらいのレベルまでリテラシーを上げるんだというような目的のようなものが必要ではないか。市町村合併と同じで、合併ありきで、何のために合併するのかという議論がなく、方法論だけで進むのはどうかと思う。

## 議長

今は技術的なことや制度的な話が中心になっているが、本当は教育の質といった本質的な部分と連動していると思われるので、残された時間で意見交換をしたい。

宮脇委員は、御自身の見解を述べられたが、それはかなり根本的な問題提起でもある。そのことに関連することでもあるので、少し技術的なことを確認するが、現在の学区制の

現状はどうなっているのか。高校は義務教育ではないのでその辺の現状を説明願いたい。

## 事務局

県立高校の学区については、現在、外部識者から成る通学区域検討委員会で検討中である。本県の県立高校の通学区域は、大きく分けて東西学区、普通科 8 校の地域設定、松江市内の普通科と理数科の小学区の 3 つである。

東西学区は、普通科、理数科、一部の専門学科（商業、機械、建築）に設けており、およそ出雲市以東と大田市以西を東部と西部に分け、学区外からの入学は定員の 5 % 以内に制限している。

普通科 8 校の地域設定は、沿線部にある安来、松江北、松江南、松江東、出雲、大田、浜田、益田の 8 校に、それぞれ「地域」を設定し、地域外からの入学は定員の 8 % 以内に制限している。例えば出雲高校であれば、旧出雲市と簸川郡が「地域」である。

松江市内の普通科の小学区は、松江北、松江南、松江東の 3 校について松江市と八束郡全域を 3 分割した小学区を設定し、学区外からの入学を認めていない。

松江市内の理数科の小学区は、松江北、松江南の 2 校について旧松江市を大橋川を挟んで南北に分け、学区外からの入学を認めていない。

これらの学区について、通学区域検討委員会では、基本的に選択幅の拡大と市町村合併に伴う新たな市町村の枠組みとの不整合を解消する方向で議論が行われている。

## 議長

今後の予定表を見ると、フリートーキングの時間は必ずしも多くないので、今日は残りの 30 分を自由な意見交換に充てたい。今の説明は、重要な学区の問題ではあるが、学区制の問題、とか枠組み的な議論よりも内容的なあり方についての議論をしていきたい。

できればどこかで、もう一度、フリートーキングの機会を設定する必要があると思うので、事務局でぜひ検討しておいていただきたい。

県立高校のこれから先、平成 21 年から 10 年間のことについて検討するので、いろいろなことを念頭に置きながら、高校のあり方について現地調査をすることも大切だと思う。

## 委員

高校のあり方や教育の質のことは非常に大事なことであり、どこかでフリートーキングの場を設定していただきたい。

委員会の流れとして、再編については結局、2 つの考え方が出てくると思う。1 つは学校の充実ということを考えると、拠点校方式がある。例えば益田地区であれば 3 校に 2、2、6 と分けるより、1 校にまとめた方が教員数が増えるし、教員数が増えるということは、生徒から見ると、部活の選択肢も広がってくる。教員がいろいろな個性を持っているので、いろいろな面で学校の内容が充実し、質が高まるということになる。

一方では、ある地域で学校 3 つをまとめて 1 つにした方が本当にいいのかということ、別の課題がある。島根県は中山間地域や離島があるので、やはり学校の存続ということは大きな問題である。

## 議長

今後のスケジュールの中で、視察や議論を一通りした後、もう一回は、意見交換することが非常に大切だと思うので、ぜひ設定していただきたい。

## 委員

統廃合という言葉が何度も出ているが、地域から学校が消えるということは、地域にとって非常に大きな問題であり、統廃合の仕方そのものを検討するのも重要だと思うが、減らさない工夫を考える、そういう議論の場が持てれば、島根県の活性化のためにも役立つのではないかと。

それと、子供たちにとって、よりよい県立学校づくりということが言われているが、学校の視察等でも校長先生とか教員の方との意見交換は設定されるようだが、本当に今の子供たちがどう考えてるかということを知る場がない。自分自身、高校卒業後、30年がたち、その当時と今の社会状況、教育環境に関しても、非常に差が出ていると思うので、私の子供のころとは違っているように思う。ぜひ、教員だけでなく、子供たちの意見を聞くことができるような機会を設けていただきたい。

## 議長

これから、地域へ調査・視察に入る場合に、現在の高校生の声や代表的な意見がうまく吸い上げられるような工夫をしていただきたい。

## 委員

3年前、県外から松江市に来て、学区とか、島根県の高校の事情を余り知らない中、子供が高校に入るときになって、いろいろなことを知り、この委員にも応募した。資料5の選抜状況を見ると、競争率が1倍を超えているところはそんなに多くないことが分かり、びっくりした。再編成、統合は大事な問題だと思うが、私は2つのことを提案したい。

一つは、学力の向上であり、再編成をする上でも、進学したい高校生の学力をどう上げていくかということが必要だと思う。

もう一つは、教員の指導力で、子供の理解力を高めるためのブラッシュアップ、指導力の向上を検討事項に上げていただきたい。

## 議長

恐らく他にも同意見の方が何人かおられるのではないかとと思うが、本当に重要なこの2つの論点について、議論ができるよう進めていきたいと思うが、事務局としてはどうか？

## 事務局

今後、一定の時間の中で、平成21年度以降10年間を見つめての高校のあり方について議論していただくので、濃密な議論が必要であると考えている。

県から諮問した内容は、大きく4点ほど検討事項として上げているが、その議論の過程で委員の方からあったように、島根の教育はどうあるべきかとか、高校入試のあり方や学力向上についてのあり方などについてまで話が及ぶと考えてり、それについてはある程度、

御意見いただくわけであるが、それを主要なテーマとする検討委員会ではないということも御理解いただきたい。いろんな御提言をいただき、さらにそれを大切にしながら、県教委でまた別の検討委員会であるとか、あるいは庁内でいろんな議論をしていきたいと考えている。

### 事務局

補足させていただくが、先ほど委員の方から指摘のあった学力向上と教員の指導力向上については、平成18年度の緊急対応事業として取り組もうとしてるところである。その具体的な内容や児童生徒の学力をどうアップするか、教員の指導力向上あるいは学校の指導システムの向上をどう図っていくか、次回以降に説明させていただく。

### 議長

そのテーマ自体では、既に検討委員会を持たれ、具体的な計画段階に入っているという説明があったが、ただ、ここで違った枠組みではあるが、現地を視察し、検討していくときに、そちらのこれまでの議論と具体的な計画の実行段階の話を伺いながら、さらにそちらにも豊かになるような議論ができればよいと考えているので、ぜひ、その報告も聞かせていただきたい。いずれにしても、こちらはこちらの考え方でそれぞれ問題提起をし、意見交換をしておくことに意味があると思う。

### 委員

今、学校訪問の件が出たが、各学校ごとにテーマとか、校訓とか、校長方針とかいうものがあると思うが、それが単なる一つの看板になってしまって、実際と結びついていない点が非常に多いのではないかという気がする。したがって、こういうテーマ、方針を持っているということであるなら、その方針に対する具体的な目標というものが設けてあって、4月の時点では、この目標のここまでいったと、5月はここまでいったというようなことを発表し、生徒も保護者も、この学校ではこういう方針でどこまで今進んでいるんだと、また、ここまで行ったが、どうもうまくいかないのだから方針を変えますよというような、そういう具体的なものがあって、それを今度訪問したときに実際に聞いて質問をしたいと思っているので、よろしく願いしたい。

### 議長

受け入れる側は、しっかり準備しておかないと、とても話し切れないという、多少矛盾した点はあるが、本当に大切なことである。

### 事務局

宮内委員から御指摘の点について、今、学校の方で2つの評価の仕組みが動き出そうとしている。一つが、学校評価システムで、これは17年度からすべての県立学校で実施をしている。これは指摘があったように、一番大きなところが、いわゆる校訓と言われるようなものであるが、その下に学校としての重点目標、そのさらに下に、本年度の重点項目を立て、それに従って、各学校の中の教務部とか進路指導部とか、各部がそれぞれの目標

を立て、それに向かってどの程度まで進捗しているかということをもとめて、評価をして、最終的には保護者あるいは地域の皆さんに公表していくというものを、スタートしたところである。

もう一つが、教員評価システムで、これは個々の教員、それから管理職、校長、教頭含めてであるが、今年度試行を行い、来年度から本格的な実施を予定している。これは先ほど申し上げた、学校としての、あるいは各部としての目標から、個々の教員の目標を立て、それを年度末にどれだけ達成できたかということをもとめて自己評価し、また校長、教頭が教員を評価し、また管理職、校長、教頭の評価については、教育委員会の方でこういう達成状況であったという評価をしていくということをもとめている。これまで、学校の中に、そういった評価、内からも外からもという評価システムはなかったが、今それが動きつつあるということで、視察の際に、そういった点を質問してもらおうと、各校長、教頭の学校経営のビジョンがより見えてくるのではないかと考えている。

### 委員

評価は年度末とか、年に1回ということであったが、私は途中経過を教えるべきではないか、知るべきではないかと思う。それによって、協力も得るし変更もするしということが必要ではないか。年に1度では不足だと思う。

### 委員

それは同感である。企業でいうレビューというか、民間でもよくあることであるが、結果の数字だけを見て、あたかもそれがうまくいったように作文してしまう。目標はどうしても帰納法でやってしまうところがあるが、今回は演繹法でやるべきである。そのためにはやはり目標のしっかりしたビジョンとか、あるべき姿とかがないといけない。ただこの教育の質を、ただ単に一流校の進学率が上がっただけで本当にいいのかと思う。それも一つの尺度ではあるが、質というのはそれこそ尺度がなくて難しい。本当に骨太の人間ができるかとか、誠実さであるとかということになる。できたら優秀な人が地元の大学に入って地元の企業に就職するとか。高校を卒業して東京の大学とか行くと、親が仕送りするわけであるが、年間200万として、今1万人出るので、延べ200億円出していることになる。18年度の県の予算が230億足りないと聞いているが、ぴったりその分だけ出ることになる。

大学の合併のときもそうだったが、文科省のがんじがらめの制約の中で、教育委員会で一応原案作っているのでは？ただ少しぐらいは変えてみようではないかという意見ではないか。校区制を全廃しろとか、某首長は、他県の有名私立高校を呼んでると言っていた。あの高校に行くと最高だからというような、そういう高校をつくりたいと。県立高校はしたたかさというのが売りなので、高校の質の高さについてはしっかりやろうじゃないかと財界でも話していた。そういう質を高めるには、先生の質をまず高めないといけない。生徒じゃなく先生、教える側のレベルが低いと、絶対いい生徒ができないと思う。

そういうことも含めて、少しでも変えていかないと、大きく変わらないと思う。教育のプログラム、カリキュラムまで全部中央で決められ、変化が多くていけないと思う。ただ、伝統とか、私は松江の高校出身であるが、浜田高校というのは連携がすごいと思う。ある

企業の社長に何でそんなに連携してるのかと聞いたら、やはり地方だからと言われた。そういう伝統というのはあると思う。どこの高校でも伝統はあるので、そういうものはそばんではいけない価値がある。何か、島根県ならではのものをつくれればいいし、必要なら特区を作るぐらいの気持ちでやってもいいと思う。

事務局の方で作られたもので肅々と物事が進んでいく場合が多いので、基本的な大枠として、できることは本当に少ないと思う。ただせっかくこれだけの委員が集まっているので、本音でこれだけを変えてほしいとか、そういうものが産学官でもっとあってもいいと思う。島根は、意外と産学官の連携が進んでいるので、これに関しても、やはりぜひそういう形でやっていただきたい。一応、枠は90数%もう決まっていると思うが、残りの少ない部分で、我々の知恵なりを合わせていいものにしていけたらと思う。

### 議長

たいへんおもしろい議論になってきたが、教員についての評価は今年初めて試行されたので、この2月、3月、校長先生は大変な思いで評価をされたところもあるのではないかなと思う。そういう全県一斉に高校の目標を立て、それをまた一定の年ごとに評価していくという態勢になってきているが、さらに島根県ならではの個性ある、何か工夫が、このような場を生かしながら、議論できればおもしろいと思う。

### 委員

次回、学校の視察が入っており、出雲地区、浜田・江津、隠岐ということであるが、委員はどのように参加するのか。

### 事務局

事務局で一応の日程案を作り、各委員にお示しし、ご希望も伺いながら、日程調整をさせていただきます。

### 委員

全部行けるということではないのか？

### 事務局

多忙な方ばかりなので全部行ってもらうのは難しいかと思うが、できるだけ多くの高校を視察していただきたい。

### 議長

多少手分けをしながら、できるだけ多くの高校を視察していただくということにしたい。そのとき今日議論したような幾つかの新しい発想で県の高校のあり方を考え、問題意識を持って聞いていただき、中間時点のどこかで全員がそろそろような場を設定してフリートークを行う、あるいは他の委員会の活動状況の報告を受けながら意見交換をするという形でできるだけ中身を豊かにしていきたい。

## 委員

高校の視察については、県教委で計画してやってもらえばよいが、せっかくこの委員になったわけであるので、例えば、委員が学校の近くへ行った場合など、委員が知りたいことがあれば自由に学校を訪問できるような、そういう扱いになればいいと思う。そうすると、先ほど発言されたようなこともできるかと思う。

## 議長

たいへん重要な提案である。委員が突然訪問することもあり得るということについて、そういうことができるのかどうか検討しておいていただきたい。

## 委員

今の話は、フリーパスポートのようなものがあるとよいのではないかと思う。

最初の説明で、平成21年度以降の県立高校の再編成等に関する検討委員会だったのが、今回から魅力と活力のある県立高校づくり検討委員会に名称が変わったということは、たいへん大きいと思う。子供が減ったから、しょうがないからそれに合わせた学校の再編を考えるとということだったら、今回のようなタイトルの委員会にはならなかったのではないかと思う。教育の質の問題など、そういうことを含めて、すごく期待している。

そこで、高校のあり方もそうだが、子供をどうしたら増やしていけるのかということの方がもっと重要ではないかという意見があったが、やはり子育て支援とか、魅力ある地域と結びつかないと高校のあり方も何もないのではないかと思う。隠岐水産高校でもお相撲さんを2人も出して、もう期待にわくわくしているし、隠岐高校の規模でも滋賀県の野洲高校のサッカー部のように、全国一になるような何かきらりと光るものをつくり上げられるような、魅力ある高校づくりに地域のみんなも一生懸命になっていきたいと考えているので、フリートーカーの中で話していけるのではないか。島根の子育て支援の資料などもあればよい。

また、先ほど高校生の意見も聞きたいという話があったが、私も同意見であり、地域公聴会には各高校から1人でも2人でも、生徒に参加してもらい、子供の意見も聞きながら進めていけるような中身にしていきたい。

## 議長

先ほど事務局から説明のあった資料を見ていると、経済学の中に地域経済循環という分析の指標があるが、そこに幾分問題があるのではないかと思う。就業機会の問題もあろうかと思うが、もう少し県内で養成した人たちが着実に成長していけるような、リカレント型の教育のシステムが重要ではないか。先ほどの子育て支援というのは、実はその先に人材育成、つまり次世代育成という課題があり、後期中等教育というのは、そのかなめになるのだと思う。中学から高校に行くときの学力をどのように保全していくかが重要なところである。県立大学で、5倍くらいの競争倍率のところでも、とても中学の学力がついていない大学生がいると聞いたことがあるが、東大の医学部に勤務する知り合いからも、実を言うと、東大の方でもそういうことがあるということを知った。そうするとやはり、今の高校全入、大学全入という時代は非常に結構ではあるが、それに見合った質的な工夫が

非常に大切になってくる。その質的な工夫を生かすような、今回の高校の再編成は、いい意味でのリストラクチャル、減らすということではなくて、再構築する、新しく造り出すということである。そういう制度や形というものと内容とが裏表であり、他の幾つかの委員会が検討された内容や、既にある計画と一緒に組み合わせながら考えていくということができればよいと思う。

#### **委員**

専門部会については4月に委嘱されるということだが、人数とか、具体的なことをもう少し詳しく教えていただきたい。

#### **事務局**

資料をお配りしているが、構成は各高校の校長と県教育庁の担当者とで組織し、専門的な事項について部会で議論し、それを検討委員会の議論の材料にしようということを考えている。

メンバーについては、4月の定期人事異動後に人選を行っていきたいと考えている。

#### **委員**

専門部会は、配付資料のスケジュールの中には組み入れられていないのか？

#### **事務局**

専門部会は、適宜、開催するように考えている。

#### **事務局**

検討委員会の議事については、議事録にまとめて後日委員の皆様にお送りし、発言等について確認をお願いしたいと考えている。その上で、県の教育委員会のホームページにその内容を公開させていただきたいと考えている。場合によっては、委員の皆様の発言内容を要約するような形のものもあるかと思うが、それも含めて確認していただきたい。公開する際には、発言者の個人名は記載せず、委員という形で発言内容を公開するということと考えているが、これでいかがか？

#### **議長**

国の審議会もそのような形で進められており、情報公開法に基づくものである。ただいまの提案でよろしいか。 《 委員同意 》

それでは、そのように進めていきたい。

これまでフリートキングでかなり広く、またたくさんの課題が出てきたが、事務局で議事録を整理していただき、課題や論点を整理していただき、進め方も工夫願いたい。

以上で、私の議長としての務めを終わらせていただきたい。

## **10 . 閉会挨拶（三浦教育監）**

閉会に当たりまして一言お礼を申し上げます。

魅力と活力ある県立高校づくり検討委員会、本日、発足いたしました。委員の皆さん方、ありがとうございました。2年という長い期間を要する検討委員会でございます。よろしくお願ひしたいと思ひます。

本日、いろいろな要望、質問等が出ております。例えばもっとフリートキンの時間をとるか、生徒と直接触れ合う機会はないだろうかとか、あるいは学校の視察を自由にしてとか、そのほかいろいろな資料を提供してほしい等々がありますが、どうぞ遠慮なくおっしやっていたきたいと思ひます。それによって、よりよい教育ができるというように考えております。

それから、広沢教育長が冒頭のあいさつで申し上げたわけですが、島根の高校生にとって何がよいのかと、それがあくまでも基本でございます。いろいろな観点があるだろうと思ひますが、そのこのところを踏まえて、それぞれの立場から自由に意見をいただきたい、そして、どこに住んでいても教育の機会均等ということから、もう一つは、教育水準の維持、向上ということから、すべてのこれからの若者に良い教育環境が与えられるということでご議論いただきたいと思ひます。

それから、教育とは未来を担う子供たちに希望を託す営みであります。そういうことになりますと、ただ教育は教育にとどまらず、政治であるとか経済、ありとあらゆる面に議論が及ぶだろうと思ひますが、この2年間の中で、会長様におかれましては、諮問の大きな4項目がありますが、お取りまとめいただくことになりまします。いろいろフィードバックしながら、多岐にわたって議論が出るだろうと思ひますが、最終的には20年の3月に最終答申ができるという方向でよろしくお願ひしたいと思ひます。

私たちは、公募委員さんを含めまして、委員さん20名をお願ひしたわけですが、やはり期待したとおり、それぞれ各界の論客の皆さん、非常に高い見識の皆さん方だなということを感じた次第でございます。どうかご健康には十分留意されまして、2年間、どうぞよろしくお願ひしたいと思ひます。

本日は、大変お忙しいところご出席いただき、熱心な協議をいただきました。まことにありがとうございました。

## 11. 閉 会

### 事務局

以上をもちまして、第1回、魅力と活力ある県立高校づくり検討委員会を閉会します。どうもありがとうございました。